

『ミジンコ』 作…ポチ子

彼女 「私はもうミジンコみたいな存在だあ」

彼氏 「は？なに？」

彼女 「仕事もできないし、人と喋るのも苦手だし、ミジンコみたいなちっぽけな存在なんです、私は。今もこうやって彼氏に家事をしてもらって、一切手伝わないゴミくずですからね。」

彼氏 「いや、家事は手伝えよ。ほんとには洗い物当番、お前なんだからな。そうやって病んでるフリすれば、代わってもらえると思ってるんだろ。」

彼女 「実際代わってくれたじゃん。」

彼氏 「皿、割ってやろうか。」

彼女 「病んだフリじゃないもん、病んでんの。」

彼氏 「はいはい。せめてテーブルの食器持ってきてくださーい。」

彼女 「はーい・・・。」

彼氏 「はい、ありがとう。」

彼女 「・・・よくよく考えたらミジンコってすごいよな。」

彼氏 「さっきまで、ミジンコみたいな存在だあとか言ってたじゃん。」

2

彼女 「だって、教科書にも載ってるし。勉強してないからミジンコがどんな存在か忘れたけど、教科書に載ってるってことは割とすごい生物なのかもしれん。」

彼氏 「まあ・・・そうかもな。」

彼女 「ミジンコに申し訳なくなってきた。」

彼氏 「ははっ。なんだ、それ。」

彼女 「なんとなくイメージだけで、ミジンコみたいな存在って言ったけど、私と一緒にされるミジンコが可哀想になつてきた。」

彼氏 「めんどくささに拍車がかかってんな。ミジンコもそんな気にしてねーよ。ミジンコ先輩は寛大だからな。」

彼女 「あんたにミジンコ先輩の何が分かるのよ。」

彼氏 「お前も分かってねーだろ。それ以上めんどくさいこと言うと、口にシュークリーム突っ込むぞ。」

彼女 「え、シュークリーム？シュークリームあるの？」

彼氏 「おう、買ってきた。冷蔵庫に入ってるよ、食べれば？」

彼女 「ほんと！？食べる！どこの？」

彼氏 「お前が美味しいって言ってたケーキ屋。」

彼女 「ええ！！ほんとに？うぎゃー、ほんとだ！食べていいの！？」

彼氏 「いいよ、新作かなんかのイチゴ味も買っておいた。」

彼女 「わー美味しそう！いただきます！・・・うまあ・・・」

彼氏 「・・・元気でた？」

彼女 「ん？なんか言った？」

彼氏 「いや、なんも。こんな時間に食ったら太るけどな。」

彼女 「たまにはいいの！ああ・・・おいしい・・・」

— 終わり —